

アンスガルの北歐伝道について

牧 野 正 憲

一

九世紀の北歐を知る上での同時代の文献史料は僅少かつ断片的であり、加えてその全てが北歐人以外の手になるものだが、その中で九世紀前半から中葉にかけて北歐の地に足を踏み入れ、伝道活動に従事したフランク人修道士アンスガル Ansgar の行動を記録した「アンスガル伝 Vita Ansgarii」は最良であり、とりわけヴァイキング時代のデンマーク史を研究する際には不可欠のものである。このような認識の上に立つて、本稿でアンスガルの北歐伝道を詳細に考察することにしたが、これによってヴァイキング時代のデンマークあるいはデンマーク王国史全般の理解を深めることに寄与できれば幸いである。

二

フランク国年代記の八二六年の条は「ハラルドが妻や多数のデーン人を率いてマインツに到来し、聖アルバン教会

で彼の随判者と共に受洗した。皇帝から多数の贈物を受取り、彼は往路を通り帰国した⁽⁹⁾。」と記述しているが、この時ハラルドに同行、デンマークに赴いた二人の聖職者がいた。アンスガルとアウトベルト Authert であった。右記の叙述はアンスガルの北欧伝道開始という北欧史上画期的な事件を包含している記録である。

アンスガルの伝道を語る前に、八二六年に至るデンマーク・フランク両王国の交渉に少し触れておく必要がある。

カール大帝治下のフランク王国の急激な北方への勢力拡張によって両国は直接国境を接することとなり、極度の緊張状態が生まれた。当時デンマーク王国の支配者であったゴッドフレッド Godfred が八〇八年フランク王国と同盟関係にあったスラヴ系のアボドリット族を攻撃したので、カール大帝は長子カールを派遣し、デーン人をユトランド半島に追込んだが、ゴッドフレッドはフリースランドを海上から襲撃、掠奪した。

ゴッドフレッドは八一〇年部下に暗殺され、彼の甥ヘミング Hemming が後継者となり、カール大帝とアイダー川附近で会見、講和した。

八一二年ヘミングが没し、デンマークでは王位継承争いが発生したが、フランク国年代記によると、ゴッドフレッドの甥シグフレッド Sigfred とかつて王位にあったハラルドの甥アヌロ Anulo とが王位をめぐり争ったが、両者共戦死した。しかしアヌロの軍が勝利を収めたので、兵士達はアヌロの兄弟ハラルドとレギンフレッド Reginfred を王に選んだ。

さらにフランク国年代記は、このハラルドとレギンフレッドが八一三年ゴッドフレッドの息子達との戦いに敗れ、王位を奪われたので、翌年再度挑戦したが、レギンフレッドが戦死するという結果に終わった。このような状況に絶望したハラルドは皇帝に庇護を求めたので、皇帝は彼を迎え入れ、援助の時期が到来するまでザクセンの地で待機するように命令した、と叙述している。

八一五年ハラルドを支援するためフランク王国軍がアイダー川を越えて侵入したが、ゴッドフレッドの息子達は反撃に出なかった。

八一七年ゴッドフレッドの息子達は皇帝に使者を送り、和睦を要請したが、皇帝はこれを拒み、ハラルドへの支援を継続した。

八一九年ハラルドは即位のため帰国した。これはゴッドフレッドの息子達の内紛から、彼らの内の二人がデンマークを分割統治するためハラルドと同盟を結び、他の二人を国外追放したからであった。

ゴッドフレッドの息子達に脅迫されたハラルドが、八二年フランク王国の援助を求めて再度訪れたので、皇帝は事態を調査するため、テオタール Theotard 伯とロトムント Rodmund 伯をゴッドフレッドの息子達のもとへ派遣した。彼らは帰国後皇帝に北欧事情を報告したが、彼らと共に「皇帝の助言と教皇の同意を得て⁴⁾」デーン人の地で布教活動に携わっていたランス大司教エボ Ebo も帰国した。このエボはアンスガルの北欧伝道初期に重要な役割を果たした人物である。

、以上のような両国関係の推移を経て、最初に述べた八二六年のハラルドの受洗という出来事が起こった。

ハラルド王の帰国を期に、皇帝はハラルドの信仰強化とデーン人へのキリスト教伝道等の任務を帯びた聖職者をハラルドに同行させる計画を立て、人選を行ったが、当時コルビー Corbie 修道院長であったヴァラ Wala がアンスガルを推挙した。そこでアンスガルは宮廷に召され、皇帝からハラルドに随行しデンマークに赴くよう要請され、快諾した。この事実を知った者達は驚きかつ彼を非難したが、同僚の修道士アウトベルトがアンスガルとの同行を決意した⁵⁾。彼ら以外にデンマークへ赴こうとする者はいなかった。

このような経過を辿り北欧伝道が開始されたが、これ以降の伝道活動については「アンスガル伝」に基づいてみて

いくことにする。

既述のように、北欧伝道は教皇より正式に承認を受けたエボによって行われていたが、彼は辛うじて国境地域で伝道できた⁽⁴⁾にすぎず、他方アンスガルとアウトベルトは教皇の承認を得ていなかったので、あくまで皇帝の使節という身分であった。

アンスガルとアウトベルトはハラルドに随行、デンマークへ向かったが、その時期は定かでない。ハラルドの受洗は八二六年六月⁽⁵⁾であるが、出発までに伝道実施のための協議や二人の準備等でかなりの日数を要したと推測されることから、彼らの出発が八二六年であったか疑問視する学者⁽⁶⁾もいる。

彼らはまずケルンに赴き、そこからライン川を下ってドレスタトに上陸、フリースランドを経由してデンマークに入った。

しかしデンマーク到着後まもなく、ハラルドがゴッドフレッドの息子達に国外追放されるというアンスガルの伝道活動にとって致命的な事件が起こり、彼らはデンマークでの活動を一時断念、国境地域へ退いた。彼らのデンマーク滞在期間は半年か一年程度であろう、とコック Koch は推測している⁽⁷⁾。

この時期の二人について「アンスガル伝」は「彼らはある時はキリスト教徒のところへ、ある時は異教徒のもとに滞在した⁽⁸⁾。」とだけ語っていることから、アンスガルがデンマークで確固たる活動基盤を築くことができなかった⁽⁹⁾、と判断してよいであろう。

さらにアンスガルと行動を共にしていたアウトベルトがその後まもなく発病し、ニュー・コルビー修道院に送還されたが、八二九年の復活祭頃死去した⁽¹⁰⁾ことも、アンスガルにとって大きな痛手となった。

アンスガルが国境地域⁽¹¹⁾に滞在していた八二九年頃、スウェーデン⁽¹²⁾からの使節が皇帝を訪づれ、伝道士の派遣を

要請したので、皇帝はヴァラとの協議で、アンスガルの派遣を決定した。アンスガルはヴァラが推挙したヴィトマル Wimar を伴ない、八三〇年春⁹⁸ 出発した。彼らはバルト海上で二度海賊の襲撃を受け、殆ど全ての持荷を喪失するという危険な旅の後、スウェーデンの商業地ビルカ Birka に着いた。

ビルカ到着後の情況について「アンスガル伝」は次のように伝えている。

「彼らの訪問の目的を使者から説明されたビヨルン Björn という王は、彼らを快く迎えた。王は有力者との協議の末、全員の賛同を得て、彼らの滞在と伝道活動を許可し、彼らから教えを受ける自由を希望者全てに与えた⁹⁹。」

こうして改宗した者の中に王の顧問でビルカの Praefectus のヘリガル Herigar がおり、八三〇年ビルカの彼の所領内に北欧最初の教会が建設された。

彼らは一年半ビルカに滞在した後、八三一年に帰国したが、この年の帝国国会¹⁰⁰ でアンスガルの功績に報いてハンブルクに大司教座を設置し、彼をその初代大司教に叙階することが決定された。

当大司教座はスカンディナヴィア全域のみならず、エルベ川北東岸地域をも含む広大な範囲をその管轄下に置いたが、管区内の教会の数はわずかに四つ¹⁰¹ にすぎず、北欧ではビルカのみという状況であった。

翌八三二年アンスガルはローマに赴き、教皇グレゴリウス四世の承認を受け正式に大司教となり、同時に北欧伝道に於ける教皇庁の特使と認知され、ここに二人目の北欧の特使が誕生した¹⁰²。そこでエボとアンスガルは協議の結果、スウェーデンにはアンスガルを補佐する司教が必要という点で一致、皇帝の同意を得て、エボの親戚のガウトベルト Gaubert を選んだ。彼は八三二年に出発し、以後一三―一四年間スウェーデン伝道に携わることとなった。

八四五年頃ビルカでキリスト教排斥運動が起り、司教のガウトベルトはスウェーデンから追放され、彼の血縁者のニトハルト Nithart が殺害された¹⁰³。「アンスガル伝」は「これは王の命令ではなく、民衆の陰謀により起こった¹⁰⁴。」と語っているが、この排斥運動の原因には「アンスガル伝」もアダムの「ハンブルク教会史」も沈黙してい

る。フアブリシウスは、ニトハルトが伝道事業を急ぐあまり、異教徒の聖所を襲ったためではないかと推論しているが、定かでない。

- (1) *Annales Regni Francorum ; Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Bd. V. Darmstadt, 1968.*
- (2) 彼は「pars aquilonia」に伝道を行う権限を、スカリヌ一世より八二二年秋から翌年春の間に賦与された。
Diplomatarium Danicum. I. Række I. Bind 789-1052. S. 10. nr. 22.
- (3) *Vita Ansgarii. C. 7. ; Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Bd. XI. Darmstadt, 1961.*
- (4) *Ansgars Levned, oversat af P. A. Fenger. København, 1885.*
- (5) 伝道活動の歴史について 書誌学上は Welanow を提唱した。 *Vita Ansgarii. C. 14.*
- (6) *Seegrün, Wolfgang, Das Papsttum und Skandinavien. Neumünster, 1967. S. 22.*
- (7) *Fabricius, L. P., Danmarks Kirkehistorie I. København, 1934. S. 29.*
- (8) *Koch, Hal, Den danske Kirkehistorie I. København, 1950. S. 54.*
- (9) *Vita Ansgarii. C. 8.*
- (10) *Koch, op. cit., S. 54.*
- (11) *Vita Ansgarii. C. 8.*
- (12) ハリッシュが受洗し帰国する際、皇帝は緊急時用として彼に Rüstingen 伯領を与えた。 *Annales Regni Francorum.* 当時のスウェーデンとは、スコーネ、ブレッキング、ハッランドを除く現在の中央スウェーデンのあたりを指すので、本稿での「スウェーデン」も以上の意味で使用する。
- (13) *Fenger, op. cit., Ann. S. 119. 462. Weibull, Lauritz, Ansgarius. Scandia XIV, 1941. S. 190. 彼は八二九年秋から八三〇年春にかけての事。*
- (14) *Vita Ansgarii. C. 11.*

- (15) *Annales Bertiniani: Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Bd. VI. Darmstadt, 1969.* 246c. 八三一年には三度帝國国会が開催されたが、アンスガルに関連した決定がなされたのは、恐らく最後のチャーチンホフ・メンでの国会に於いてであろう。
- (16) *Fabricsius, op. cit., S. 33.*
- (17) *ヤギヒツシツ註(2)を参照。* アンスガルの場合、*in omnibus circumquaque gentibus Suenonum sine Danorum necnon etiam Slavorum vel in caeteris ubicunque illis in partibus constitutis.* とする表現が用いられている。*Diplomatarium Danicum. I. Række I. Bind. 789-1052. S. II. nr. 25.*
- (18) これ以降七年間(八四五—八五二)デンカには一人の聖職者がいなかった。*Vita Ansgarii. C. 19.*
- (19) *Vita Ansgarii. C. 17.*
- (20) *Adam von Bremen. I. 21; Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Bd. XI. Darmstadt, 1961.*
- (21) *Fabricsius, op. cit., S. 35.*

三

八三一年末から八四八年までのアンスガルの活動は停滞し、この期間中デンマークやスウェーデンを訪問したという記録はない。その主因として、三つの事件すなわちフランク王国宮廷の内紛、八四三年の帝國三分割としてヴァイキングのハンブルク襲撃を挙げることができよう⁽¹⁾。ここで簡単にこれらの事件に触れておこう。

まず宮廷の内紛について。八三二年の内乱で皇帝は一旦退位を余儀なくされたが、翌年復帰したことから反皇帝側に与したヴァラやエボは窮地に陥り、ヴァラはイタリアに逃亡、もまなくその地で没した⁽²⁾。他方エボは皇帝の報復を恐れてデンマークへの亡命を企てたが途中で捕えられ、八四〇年まで監禁生活を送った⁽³⁾。その間八三五年に彼は

ランス大司教の地位を剝奪されている。八四〇年の皇帝の他界と同時に解放されたエボは、短期間大司教の地位に復帰したが、八四五年ヒルデスハイムの司教に任命されたにとどまり、八五一年当地で死んだ。この事件を契機にアンスガルは二人の有力な政治的後継者を失った。

第二の帝国三分割⁽⁴⁾いわゆるヴェルダン条約で、ハンブルク大司教座はルードウィヒの支配領域に編入されたが、アンスガルの最も重要な経済的基盤であったツールホルトの修道院⁽⁵⁾はカールの支配下に組込まれ、レギナル Reginar という人物に譲渡されたため、アンスガルは経済的にも大打撃を被った。

第三の事件は八四四年東フランクのルードウィヒがデンマークに従属していたアボドリット族を屈服させた⁽⁶⁾ことに起因している。そこで八四五年デンマーク王ホーリック一世⁽⁷⁾は六〇〇隻からなる艦隊を率いてエルベ川を溯り、ハンブルクに侵入、これを破壊した⁽⁸⁾ので、アンスガルと修道士達はこの町を放棄せざるを得なかった⁽⁹⁾。

このように三つの事件はアンスガルの伝道のあらゆる基盤を破壊し、活動の停滞を生じさせる原因となった。

ハンブルクが劫掠された年の八月二十四日、ブレーメン司教ロイデリッヒ Leuderich が死去し⁽¹⁰⁾、その後任にアンスガルが推挙された。この問題の討議は八四七年一〇月のマインツの教会会議で行われた⁽¹¹⁾が、ここで決定されたことは八三一年以前の状況の再構築であった⁽¹²⁾。その結果、フェルデンとブレーメンの司教区はハンブルク大司教座設置の際に失なった地域を回復、他方アンスガルはハンブルクではなくブレーメンの司教に就任し、さらに北歐伝道の拠点ハンブルク大司教座はフェルデン司教区のもとに置かれ、事実上消滅した。しかしまもなくこの決定の誤りが指摘され、翌年の帝国国会⁽¹³⁾でハンブルク大司教座をブレーメン司教座と合併し存続させることが決議された。このためエルベ川以東を再度失なうことになったフェルデン司教区には、ブレーメン司教区の一部を割譲することも同時に決定された。

八四五年に破壊されたハンブルク大司教座は、以上の推移を辿り新たにハンブルク・ブレーメン大司教座という形態で復興され、アンスガルは初代大司教としてここを拠点に終身活動することになった。

しかし彼はまたも新たな困難に遭遇した。それは既述の決定に対するケルン大司教 Günther の異議⁹⁹であった。

先述の討議が行われていた時期ケルン大司教座は空位であった¹⁰⁰が、八五〇年四月ケルン大司教に Günther が就任したので、アンスガルは決定への同意を彼に求めた。というのも、ブレーメンはケルンの属司教区だったからである。しかし Günther がこれに非常に強い異議を唱えたので、ルードウィヒとロタールの両国王をはじめ、アンスガルを含む多数の司教が列席して、ウォルムスで会議が開催された¹⁰¹。Günther は属司教座の大司教座昇格はケルン大司教座の威信の底下を招く不当な決定であると異議理由を述べた¹⁰²が、列席の国王や司教が彼に同意を要請、さらに今回の決定は已むを得ないものと宣言されたので、Günther も教皇の承認を条件にこの決定に同意した。そこでルードウィヒはコンスタンツ司教サロモ Salomo をローマに派遣¹⁰³、教皇ニコラウス一世の承認を得た¹⁰⁴。

註(1) Fabricius, op. cit., SS. 36-37.

(2) 八三六年。

(3) Annales Bertiniani.

(4) Vita Ansgarii. C. 21. は「王国の分割はアンスガルの伝道活動を麻痺させるような影響を及ぼし始めた」と記述している。

(5) Vita Ansgarii. C. 12. によると「この修道院はアンスガルが大司教に叙階された時皇帝より贈与されたもので、アンスガルにとって経済的基盤であると同時に緊急時の避難場所としての機能も持っていた。

(6) Annales Bertiniani, Annales Fuldenses; Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters. Bd. VIII. Darmstadt, 1969.

(7) 在位?—八五四年。

- (8) Annales Bertiniani, Annales Fuldenses.
- (9) Vita Ansgarii. C. 16.
- (10) Adam I. 23.
- (11) Annales Fuldenses.
- (12) Fenger, op. cit., Ann. S. 132.
- (13) 八四八年の「イン・ン帝国国会」° Annales Fuldenses.
- (14) ハック¹⁵ Günther がルー・ウィッヒは「ロタールの臣下であったことが」、この決定の諒解を困難にした、と述べている° Hauck, A., Kirchengeschichte Deutschlands. II. S. 704.
- (15) Hilduin が八四五年に他界し、八五〇年四月二二日 Günther が就任するまでの約五年間空位であった。
- (16) 八五七年° Seegrün, op. cit., S. 34.
- (17) Vita Ansgarii. C. 23.
- (18) アンスガルの Nordfried という人物をサロモに随伴させた。 Vita Ansgarii. C. 23.
- (19) Vita Ansgarii. C. 24. も指摘しているように、ハンブルク・ブレーメン大司教座が最終的に承認され、ケルンからの独立が保障されたのは、八六四年の教皇ニコラウス一世の教書によってである。これより先、ロタールの離婚問題で彼と教皇庁が鋭く対立した時、Günther がロタールを支持し、八六三年ケルン大司教の地位を追われたことは、アンスガルにとって幸運であった。

四

幾多の難局を乗り切ったアンスガルはデンマーク伝道を再開し、ルー・ドウィヒの使者として度々ホーリック王を訪問、両国の友好関係維持に尽力したので、王はアンスガルを顧問會議に同席を許すほど信頼に足る人物と見做すようになった(20)。

このような信頼を勝ち得たアンスガルが王にキリスト教を説いたのは当然の成行きであった。また当時デンマークでは聖職者の常時滞在や教会建設は容認されていなかったたので、これを機にアンスガルは王を説得、許可を得た。そこでアンスガルは繁栄を誇っていた商業地ヘゼビュー^① T. Hedeby、^② Haithabu、を教会建設地に選んだ。八五〇年頃デンマーク最初の教会が建立された。

ヘゼビューでの教会設置はヨーロッパ商人に好感を持って迎えられ、この地に来訪する商人の数も増大した。交易の一層の発展は教会建設の直接的成果であった^③、とフアブリシウスは語っている。

アダムは「アンスガルはホーリック王を改宗させた^④」と記述しているが、「アンスガル伝」にはそのような記録は存在しない。恐らく「アンスガル伝」が真実であろう。なぜなら王の改宗が事実ならば、それは特筆に値する出来事で、「アンスガル伝」が黙過するはずがないからである。

デンマークでの目的を一応達成したアンスガルは、八四五年の事件以降放置されているスウェーデンに眼を向け、八五二年まず修道士アウトガルを送ったが、彼は修道生活にもどるため、短期間滞在した後帰国してしまった。そこでアンスガルはビルカ再訪を決意し、七年前ビルカを追放されたガウトベルト^⑤に協力を求めたが果せず、かわってガウトベルトの甥エリンベルトの同行が決定された。アンスガル達はルードウィヒの使者を伴ない、前回（八三〇年）とは異なり、非常に順調な二〇日の航海の後、ビルカに到着した^⑥。

ビルカにおけるキリスト教受容の経過について「アンスガル伝」は詳細に伝えている^⑦が、ここでは簡単に触れておこう。

アンスガル達はまずスウェーデン王オーラフに来訪の目的を語ったところ、王は神意と民衆の意向とを確認の上、アンスガルに回答すると述べ、王は卜占で神々の意志を悟り、二つの地域における民衆 *the people* ^⑧で民衆の賛同を得た後、アンスガルにキリスト教受容を伝えた。そこで彼はビルカに教会を建立、これを同行のエリンベルトに委託し、

帰途についた。

アンスガルのビルカ滞在中にデンマークで政変が起こった⁽⁹⁾。フルダ年代記は、ホーリック王とヴァイキング遠征から帰国したグドルム Gudrum との間で戦いが起こり、多数の者が殺され、王族ではホーリックという少年⁽¹⁰⁾が生き残ったのみであった、と記録している。

この政変でアンスガルと旧知の支配者層全てが戦死したため、アンスガルのデンマークに於ける影響力は一時期極めて低下し、異教徒の反撃を蒙ることとなった。シュレスヴィヒ伯ホーヴェ Hove は王にキリスト教一掃を進言⁽¹¹⁾、自らはヘゼビュー教会の閉鎖、キリスト教信仰の禁止、聖職者の国外追放等を実施した。アダムは同事件の首謀者をホーリック二世と名指している⁽¹²⁾が、彼はその後まもなくホーヴェを追放し、ヘゼビュー教会を再興していることから、アダムはホーヴェとホーリックを混同したのであろう。ホーリックは東フランスとの友好関係維持を念頭に置き、前述の方策を取り、加えて新たに聖職者の派遣を求めた。王はまたヘゼビュー教会に鐘の設置を認め、さらにリーベ Riepe に教会建設に必要な土地を提供、一人の聖職者の常駐をも許可した⁽¹³⁾。

この時期以降、アンスガルは北欧へ聖職者を派遣してはいる⁽¹⁴⁾が、自らはブレーメンに留まり自己の教区の整備や困窮者・寡婦等の救済に力を注ぎ、死去するまで北欧伝道を行ってはいない。彼は八六五年二月に他界、ブレーメンの聖ペテロ教会に埋葬された⁽¹⁵⁾。

- 註
- (1) Vita Ansgarii. C. 24.
 - (2) Fabricius, op. cit., S. 42.
 - (3) Adam I. 25.
 - (4) 彼は当時 Osnabrück の司教であった。
 - (5) Vita Ansgarii. C. 26.

- (6) Vita Ansgarii. C. 26-28.
- (7) 開催された二つの民会とは、多分スヴェア人とイエート人のそれであろう。スウェーデンは当時二つの有力な地域、すなわち南部のイエート人の地域と北部のスヴェア人の地域とに分れていたことから、この箇所はオーラヴ王が両地域を統治していたことを示唆している。
- (8) 八五四年。
- (9) ホーリック二世。
- (10) Vita Ansgarii. C. 31. によると、ホーリック二世の有力者達は、ホーリック一世や多数の首長の戦死の原因は、彼らのキリスト教容認に対する神々の怒りにある、と語った。
- (11) Adam I. 28.
- (12) Vita Ansgarii. C. 32.
- (13) Vita Ansgarii. C. 33.
- (14) Adam I. 34.

五

以上アンスガルの北欧伝道を述べたが、その成果はどうであろうか。「アンスガル伝」は「我々がかの民族のもとで開始したことが、ある時期には妨害されようとも、神の恵みにより結実し、成功裡に完了するであろう⁽⁹⁾。」というエボの言を記載しているのみである。

他方アダムは「彼ら(デンマーク王達)は全て異教徒であり、……王国内の度重なる激変や野蛮人の征服戦争にもかかわらず、聖アンスガルがデンマークに植付けたキリスト教は全く滅び去ったわけではない⁽¹⁰⁾。」と語っている。史料の以上の表現から、アンスガルの伝道が大きな成果を収めなかったと判断できよう。

それではその原因はなににあったか。まずハウクは、アダルダクやアダルベルトとは異なり、アンスガルを非政治的人物と見做し、ウンニと共に伝道司教という評価を彼に与えた⁽⁸⁾。上で、失敗の原因を「アンスガルの責任ではない。この時代のドイツ教会にあって彼ほど私欲なく活動した人物は他に類をみない。にもかかわらず彼が多くを成しえなかったのであれば、その原因はルードウィヒの政策とドイツ教会がアンスガルを孤立させたことにある⁽⁹⁾」と語り、ドイツとドイツ教会の責任の重大さを指摘した。

一方コックは原因を明確に指摘してはいないが、アンスガルについて「彼は半ば外交官としての立場、豊富な贈物そして個人的権威により、名声を得たドイツ人高官として行動し⁽¹⁰⁾」、「大司教としての彼は「アンスガル伝」とは異なり、世故にたけた政治指向の人物である⁽¹¹⁾」と述べ、ハウクと全く逆の評価を提出した。この評価は北欧の学者の一般的所見とみてよいであろう⁽¹²⁾。アンスガルはドイツとの関係維持に有益な政治家として北欧に迎えられたことは、スウェーデンやデンマークの王の彼への対応が充分証明している。しかし当時の北欧には国家統一をなしうる強力な政治勢力は存在せず、またドイツも政治的混乱期にあったことから、北欧の支配者がキリスト教導入の必要性を認識するに至らず、アンスガルが政治家あるいは伝道士として活躍可能な基盤は殆どなかったことが、失敗の原因として考えられよう。これらの情況はデンマークがキリスト教国となる九六〇年頃⁽¹³⁾とは著しい対照をなしている。

アンスガルの北欧伝道は失敗に終わったが、ヴェイブルがアンスガルを「当時の情勢下で必要とされた理念を持ち、精力的に行動し交渉を行った人物⁽¹⁴⁾」と評したように、幾多の困難に遭遇したにもかかわらず、彼が長い生涯を通してドイツと北欧の支配者層と友好関係を維持し、活動しえたことは、アンスガル個人の努力の結果であり、同時に彼の功績⁽¹⁵⁾とすべきであろう。彼の死後約七〇年間北欧伝道が中断したという事実は、彼に対するこの評価が妥当であることを如実に物語るものと言えよう。

アンスガルの伝道により、デンマーク王国はドイツ司教区の一部となり、その結果これ以降少なくとも二五〇年に及ぶ対ドイツ政策上多大の影響を被ることになったが故に、クリステンセンが指摘している⁴⁰⁾ように、アンスガルはデンマーク政治史上重要な意義を有する人物の一人と理解してよいであろう。

註(1) Vita Ansgarii. C. 34.

(2) Adam I. 52.

(3) Hauck, III. S. 654.

(4) Hauck, II. S. 707.

(5) Koch, op. cit., S. 59.

(6) Koch, op. cit., S. 61.

(7) パルメは「アンスガルは教会内での権力的立場の強化に熱心な中世の聖職諸侯であった。北欧伝道はそのための方策であり、アンスガルの目的は北方の野蛮人にキリスト教を広めることではなかった。と同時にアンスガルの伝道活動は政治的経済的要因を背景として説明されるべきである。」と極論している。Palme, Sven Uirik, Kristendomens genombrött i Sverige. Stockholm, 1962. S. 48.

(8) この時期の政治情勢については、拙稿「ハラルド青歯王時代に関する一考察——デンマーク・ドイツ関係を中心に——」(関学西洋史論集第一〇号、昭和五六年一月)参照。

(9) Weibull, op. cit., S. 199.

(10) Koch, op. cit., S. 62.

(11) Christensen, Aksel E., Vikingetidens Danmark. København, 1969. S. 138.

——大学院博士課程後期課程——